

『古今著聞集』卷第五和歌第六、西行和歌説話の

編集意図について

小野寺 貴 之

はじめに

『古今著聞集』巻第五和歌第六に採られている一五六話と一五七話は、連続する西行に関連する和歌説話である。次にその本文を二話続けて引用する。

一五六 西行法師、崇徳院の讃岐配流を悲しみ、
寂念と唱和の事

保元の乱によりて、新院、讃岐の国に遷らせおはしましにけり。和歌の道すぐれさせ給ひたりしに、かかるうきこと出できたれば、「この道、すたれぬるにや」とかなしくおぼえて、寂念法師がもとへよみてつかはしける。西行法師、

ことの葉のなさけたえぬる折ふしにありあふ身
こそかなしかりけれ

返し、寂念法師、

敷島や絶えぬる道もなくなくも君とのみこそ跡
をしのばめ

一五七 西行法師、和歌を兵衛局に贈る事

西行法師、法勝寺の花見にまかりけるに、その日、上西門院の女房おなじく見ける中に兵衛の局ありと聞きて、「昔の花見の御幸思ひいで給ふらん」などいひて、その日雨の降りたりければ、かくぞ申し侍りける。

見る人に花も昔を思ひ出でて恋しかるらし雨に
しほるる

返し、兵衛の局、

いにしへをしのぶる雨と誰か見ん花に昔の友し
なければ

この二話は、西行の家集である『山家集』や、その生涯を伝える『西行物語』など、他の西行関連の類話にも見られるエピソードである。しかしこれらの類話と比較していくと、原拠と擬せられる『山家集』の当該部分と『古今著聞集』では、表現しようとしている意図が異なっている可能性が考えられる。特に一五七話における『山家集』との詠歌状況と返歌の違いは、その異同を比較すると、仮に『山家集』を原拠としている場合は改変と云って良い水準のものであると思われる。

本稿では、『古今著聞集』一五六話、一五七話と、それに相当する『山家集』やその他の西行の家集、『西行物語』のエピソードを比較し、『古今著聞集』の編者の側に話の意味を変更する意図が存在した可能性について検討する。その過程で、一五七話の返歌については従来と異なる解釈を提示し、以前拙稿で示した、『古今著聞集』和歌の部における編者の意図的な改変の可能性についても改めて考察する。

一、『古今著聞集』一五六話における他出の

類話とその異同について

1 詠歌状況による分類

『古今著聞集』巻第五、和歌の部の一五六話は保元の乱の後、讃岐国へ崇徳上皇が流された後の歌壇の状況に端を発している。この類話は、『山家集』などの西行の私家集と『西行物語』文明本、『平家物語』延慶本などに見られるが、いくつかの異同がある。その違いについては、詠歌状況や和歌に対する言及によって三つに分けられる。

まず、一五六話と状況が類似している『山家集』と『西行物語』について見ていく。

讃岐におはしましてのち、歌と云事の世にいと
聞えざりければ、寂然がもとへいひつかはしけ
る

言の葉のなさけ絶えにし折節にあり逢ふ身こそかな
しかりけれ

返し 寂然

敷島や絶えぬる道に泣くも君とのみこそ跡を忍ば
め

〔『山家集』下雑 一三二八、一三二九番歌⁽³⁾〕

すでにさぬきの国へ、ことやうにてくだらせ給

て後、世の中にうたなどよむ事たえてきかざり
ければ、寂然がもとへつかはしける。

ことの葉のなさけたえぬるおりふしに ありあふ身
こそかなしかりけれ

返し、

しきしまやたえぬる道になくも 君とのみこそあ
とをおしまめ

(『西行物語』文明本⁴)

『山家集』の贈答と『西行物語』文明本のこの話は状
況がほとんど同じである。いづれも崇徳院が讃岐に配流
されたことを受け、その後の歌壇の状況を寂然と憂いて
いる。

『古今著聞集』の一五六話も右の二例と詠歌状況が同
様であり、崇徳院配流後の状況で「この道、すたれぬる
にや」と「歌の道」に対する西行の憂いが挿入される。
固有名詞の相違に関しては、西行が歌を送った相手が
『山家集』、『西行物語』では「寂然」であるのに対して、
『古今著聞集』一五六話では「寂念」となっている問題
があるが、これについては漢字をどちらも「じゃくね
ん」と読めることから区別がつきにくいこと、西行との
贈答では、寂然が相手であることのほうが多いことなど
から、この場では誤記として処理する。

次に『山家集』、『西行物語』や『古今著聞集』と異な
る、崇徳院が流されたことを聞いた西行が歌を二首詠む
という『平家物語』延慶本の形式を見る。

卅六 讃岐院之御事

廿九日讃岐院御追号アリ崇徳院申ス此院申去保
元々年悪左府頼長公勸依世乱マシシ御事也其合
戦庭逃出サセ御マシテ仁和寺寛遍法務御坊へ御幸ナ
リタリケルカ讃岐国被移マシマス由聞其比西行聞
ヘシ者カクソ思ツケシ

コトノハノ情絶ヌル折節有合身コソ悲カリケレ
シキ鳴ヤ絶ヌル道ナクモ君ノミコソ跡(シ)
ノハメ

(『平家物語』延慶本⁵)

この話が他の話と大きく異なるのは、歌を送った相手で
ある「寂然(『古今著聞集』では寂念)」の存在がないこ
とと、他の話で憂慮されている、崇徳院配流後の歌壇の
状況に対する言及がないことである。
以上のことを整理すると次のようになる。

A系統 『平家物語』延慶本

・詠歌状況…「讃岐国へ移されます由を聞

きて」

・贈答相手…なし

B系統 『山家集』詞書／『西行物語』文明本

・詠歌状況…「歌と云事の世にいと聞えざりければ」

「世の中にうたなどよむ事たえてきかざりければ」

・贈答相手…寂然

C系統 『古今著聞集』一五六話

・詠歌状況…「この道、すたれぬるにや」とかなしくおぼえて」

・贈答相手…寂念(寂然か)

右の整理を見ると、Cの『古今著聞集』一五六話は贈答相手に違いがあるものの、これを誤記と整理すれば分類Bと同様の文脈にある。ただし、詠歌状況をより詳しく見ていくと、「(歌が)聞えざりければ」という世の中の状況を受けた形のBに対して、Cでは「この(歌の)道、すたれぬるにや」という、悲嘆する西行個人の主観としての歌壇の衰微が強調されている。またBでは寂然の返歌で登場する「道」という言葉が、Cではすでに崇徳院

についての説明「和歌の道すぐれさせ給ひたりし」の中に用いられ、西行個人の主観である「この道」に繋がっていくことには注意が必要である。次節ではこの「道」という語が強調されたC系統、『古今著聞集』一五六話の構造を見ていく。

2 三つの「道」の位相と一五六話の成立意図

保元の乱によりて、新院、讃岐の国に遷らせおはしましにけり。和歌の道すぐれさせ給ひたりしに、かかるうきこと出できたれば、「この道、すたれぬるにや」とかなしくおぼえて、寂念法師がもとへよみてつかはしける。

(傍線部は稿者による、以下同じ)

『古今著聞集』一五六話では右の傍線部に示したように、歌の贈答に入る前に「道」という語が二箇所登場する。これは原拠と思われる『山家集』の相当箇所では贈答相手の寂然(念)からの返歌

敷島や絶えぬる道もなくなくも君とのみこそ跡をし
のばめ

において初めて出てくる語である。

こうした『山家集』の詠歌状況を増補したような歌の贈答の前段部分は、歌集としての流れの中に配置されている詞書と歌を、説話として単独で成立させる際に受け手が分かりやすくするための変化とも説明付けることができる。しかし、それでは一五六話の説話内に『山家集』の「歌と云事の世にいと聞えざりければ」という表現をそのまま用いるのではなく、西行の主観として「この道、すたれぬるにや」と言わせたことに疑問が残る。

西行の言葉である「この道」とは、その前に崇徳院の説明として使用されている「和歌の道」を指している。崇徳院の「(すぐれさせ給ひたりし)和歌の道」とは、崇徳院個人の高い作歌能力を示していると受け取れることもできるが、その後に来る廃れることを危惧する西行の言葉から、院個人の和歌に対する才能と牽引力の結果として、必然的に隆盛していたであろう歌壇の状況そのものを指す意味に定めることができる。

この一五六話のそれぞれの「道」という語が示す位置関係を整理すると、西行は、崇徳院が讃岐に配流されたことで院を中心に興隆していた「和歌の道」に対して「この道、すたれぬるにや」という悲嘆の気持ちを抱き、その気持ちを「ことの葉の」と歌に詠み寂然(念)へ贈った、その返歌として「敷島や絶えぬる道も」と寂然

(念)が詠んだという構図になる。一五六話における「道」という語の配置は次の通りである。

崇徳院の説明…「(すぐれさせ給ひたりし)和歌の道」

西行の言動…

「この道、すたれぬるにや」#「ことの葉のなさけたえにし」

返歌 =

「敷島や絶えぬる道もなくなくも」

この一五六話の構図からは、西行が懸念する「この道」に対応して寂然(念)の「敷島や絶えぬる道も」の「道」の語が導かれたという文脈になる。つまりは

「崇徳院によって隆盛していた」和歌の道

←

「すたれぬる」この道 = 「たえぬる」ことの葉のなさけ

=

「絶えぬる道」

という対応関係が結ばれることとなり、寂然(念)側の意図にかかわらず、この説話の受け手には

〔崇徳院によって隆盛していた〕「和歌の道」

＝
〔絶えぬる道〕

として返歌の意図が解釈されることになる。等号の右側が説話による独創の表現であるから、この関係は寂然(念)の返歌の「絶えぬる道」が「崇徳院によって隆盛していた」和歌の道」とイコールであると、編者が寂然(念)の和歌内に包含されている問題意識を限定したものと整理できる。一見妥当性のある限定に見えるが、『山家集』の詞書の表現では、西行は「讃岐におはしましてのち、歌と云事のいと聞こえざりければ」というように、崇徳院が流された後の「歌壇の状況」に焦点を当てて憂いているとも捉えられる。また寂然(念)の返歌にしても、崇徳院配流後の歌壇を憂う同時代人としての問題意識が西行と共有されていることは容易に想像できるにせよ、相当する場面だけで見れば、「ことの葉の」詠に対する共感や同調以上のことは読み取れない。当然のことながら、この返歌は元々『古今著聞集』一五六話にのみ登場する「和歌の道」や「この道」といった語と対応して作られた歌ではなく、「絶えぬる道」という語もそこから導かれたものではない。むしろ逆であるのだが、この説話を素直に読んだ際に受け手が読み取るであろう関係

性は実際とは反対である「和歌の道」↓「この道」↓「絶えぬる道」と受け取ることができるよう編集されている。

以上のことから一五六話は、単に歌壇の状況を憂うという『山家集』の詞書通りの意味に留まらず、崇徳院の存在を強調する形で「絶えぬる道」という語を限定したい意図があったのではないか。

『古今著聞集』一五六話の編者は『山家集』における寂然(念)の返歌「敷島や絶えぬる道も」詠における「道」の語を説話構成のキーワードとして、そこから導いた「崇徳院によって隆盛した」和歌の道」という原拠にはない説話独自の要素を作り出した。そして西行が「この道」の行く末について憂うという、これも原拠にはない誇張を挟むことで、「崇徳院によって隆盛した」和歌の道」が「すたれぬるにや」という悲嘆の気持ちを西行の歌「ことの葉の」詠に込めることができた。その結果、返歌である「敷島や絶えぬる道」詠を、「崇徳院によって隆盛した」和歌の道」という要素があって導かれた歌であるかのような形で接続させることに成功している。こうして結ばれた「崇徳院によって隆盛した」和歌の道」＝「敷島の絶えぬる道」という等式を持つ説話は、『山家集』よりも一層崇徳院の役割に焦点を当てた形で原拠を上書きしている。

ここに『古今著聞集』一五六話の意図的な編集の痕を見る事ができるのではないだろうか。

二、『古今著聞集』一五七話における他出の類話とその異同について

1 詠歌状況による分類

『古今著聞集』和歌第五卷第六の一五七話は、一五六話に続いて西行が登場する和歌説話である。法勝寺で行った上西門院の女房たちの花見に関連して、西行が兵衛の局に、在りし日の花見を思い出させようと和歌を送る話となっている。

この説話の類話として、『山家集』や『西行法師家集』、『山家心中集』に相当する箇所があり、また文明本『西行物語』にも同様の記述がある。『古今著聞集』一五七話も含めたこれらの類話群は、詠歌状況と兵衛の局の返歌の異同から、大きく二つの系統に整理することが可能である。

一つ目は、『山家集』や『西行法師家集』、『山家心中集』に収められているものである。それらの相当部分を順に見ていく。

上西門院の女房、法勝寺の花見侍けるに、雨の降りて暮れにければ、帰られにけり、又の日、兵衛の局のもとへ、花の御幸思出させ給らんと覚えて、かくなん申さままほしかりしとて、つかはしける

見るひとに花も昔を思ひ出でて恋しかるべし雨にしをるゝ

返し

いにしへを偲ぶる雨とたれか見ん花もその世の友しなれば

若き人くばかりなん、老いにける身は風の煩はしさに厭はるゝ事にてとありける、やさしく聞えけり

〔『山家集』上 春 一〇一番、一〇二番歌⁸〕

上西門院の女房、法勝寺の花見られしに、雨の降て暮にしかば、かへられにき、又の日、兵衛の局のもとへ、花のみゆき思ひ出させ給ふらんとおぼえてなど、申さままほしかりしとて、申おくり侍し

見る人に花も昔を思ひ出て 恋しかるらし雨にしほるゝ

返し

いにしへを忍ぶる雨に誰か見ん 花もその夜のとも
しなれば

(李花亭文庫本『西行上人集』春

一二七、一一八番歌)

上西門院の女ばう、法勝寺のはなみられしに、
あめのふりてくれにしかばかへられにき、又の
日兵衛のつぼねのもとへ、花のみゆきおもひい
でさせたまふらむとおぼえて、かくなん申さま
ほしかりしとて、おくりはべりし

みる人に花もむかしをおもひいで、恋しかるべしあ
めにしほるゝ

返し

いにしへをしのぶるあめとたれかみんはなもそのよ
のともしなれば

わかきひとぐばかりなん、をいにける身はかぜ
のわづらはしさにいと

はるることにてとありし、いとやさしくきこえ
はべりき

(伝西行自筆本『山家心中集』

一八四、一八五番歌)

これらの系統では、法勝寺の花見をしていた上西門院の

女房たちは雨が降って夕方になったので帰ってしまい、
西行は花見とは別の日に兵衛の局へ歌を送っている。ま
た返歌には、西行による自撰が原型とされる『山家集』
と『山家心中集』に左注が存在し、兵衛の局から見て周
圍の人間が若いことなどが書かれ、自らの老いを嘆くと
ともに、花の縁語として「かぜ」を用いて風邪をひいて
花見に行かなかったことが綴られている。

二つ目の系統は、本稿で扱う『古今著聞集』一五七話
と文明本『西行物語』に共通するものである。次に文明
本『西行物語』を見てみる。

むかし見なれしことなれば、法勝寺へ花見にまかり
たりければ、じやうとうもん院の女房たち花見られ
けるなかに、兵衛のつぼねのもとへ、むかしの花の
御幸おもひ出給ふらんとて、その日雨ふりければ、
かくぞ申つかはしける。

見し人に花もむかしをおもひいで、恋しかる
らむ雨にしほれて

御返事に、

いにしへをしのぶる雨とたれか見ん 花にむか
しのともしなれば

(文明本『西行物語』)

上西門院が「じゃうとうもん院」となっている¹³⁾ことを除けば、「はじめに」で掲載した『古今著聞集』一五七話と同じ内容である。この系統は上西門院の女房達が雨の中法勝寺の花見をしているその日、その中にいる兵衛の局に対して、西行が歌を詠みかける形となっている。また兵衛の局の返歌の下の句が、『山家集』などの系統と異なっている。

これらのことを整理すると、次のようになる。

A系統 『山家集』／『西行法師集』／『山家心中集』

・ 詠歌状況・女房達は花見を雨で帰り、西行は別の日に兵衛の局に歌を送る。

兵衛の局の老いと、風邪による欠席に関する

左注が『山家集』『山家心中集』にあり

・ 返歌下句・花もその世の友しなければ

B系統 『古今著聞集』一五七話／文明本『西行物語』

・ 詠歌状況・女房達は雨の中花見をし、西行はその中の兵衛の局に歌を送る。

・ 返歌下句・花に昔の友しなければ

この二つの系統は詠歌状況が異なる上、兵衛の局の返歌の下の句もそれに対応した形で変化していると考えられ

る。次に返歌の解釈について考察する。

2 一五七話における兵衛の局の返歌「花に昔の友し

なければ」とその解釈

一五七話における兵衛の局の返歌は、同じ場所で行われたかつての御幸について、思い出させようとした西行の歌

見る人に花も昔を思ひ出でて恋しかるべし雨にしほ
るゝ

に対して詠まれている。降っている雨は昔のことを思い出した花の涙だというのである。

前節では、返歌を詠む兵衛の局の状況が二つの系統に分けられると整理した。A系統は、花見が行われた後の日に歌が送られて来て、左注を見る限りは兵衛の局は花見もしていない状況で、また左注がなくとも時間的にも空間的にも花見からは隔たった状況で次のような返歌をしている。

いにしへを偲ぶる雨とたれか見ん花もその世の友し
なければ

この歌の解釈について、日本古典文学大系『山家集 金
槐和歌集』で「山家集」部分を担当した風巻景次郎氏は、

古を忍ぶ花の涙が、雨となって降るのだと誰が見よ
う、花もその心を知る昔の友(すなわち作者)が居な
かったので、の意。花を擬人している⁽¹⁴⁾。

とし、新潮日本古典集成『山家集』の後藤重郎氏も

花見御幸の昔をしのんでの涙が雨となったとは誰が
見ましようか。桜の花もその昔の友である私がいな
かったことですから⁽¹⁵⁾。

と同様の解釈をしている。また和歌文学大系『山家集』
では西澤美仁氏が、

途中で降ってきたあの雨を昔を偲ぶ雨だなんて、私
の他に一体誰が思ったことやら。三院ともいらっし
ゃらなくなつて、花の方も当時からの友はいなかつ
たんですから⁽¹⁶⁾。

としている。風巻氏と後藤氏は兵衛の局が花見に行かな

かったという前提で、花にとつての昔の友＝私(兵衛の
局)と解釈している。一方、西澤氏の訳からは「途中で
降ってきたあの雨を」と、兵衛の局が花見の場にいたと
いう前提で解釈し、花にとつての友を、過去の御幸にい
た三院(白河院、鳥羽院、待賢門院)を指すものとしてい
ると思われる。この花にとつての「友」の部分について、
直近の『山家集』注釈書においても宇津木言行氏が「そ
の当時の友である私(兵衛)」と解し、風巻氏、後藤氏の
解釈を継承している。どちらの解釈にも共通しているの
は、下の句は擬人化された花を主体として詠まれている
ということである。

『古今著聞集』一五七話と文明本『西行物語』に見ら
れるB系統は、法勝寺における雨中の花見に兵衛の局が
おり、その場で西行が歌を送ったという状況である。兵
衛の局は雨の中、眼前には花があり、周囲には女房達の
花見が行われている状況下で

いにしへをしのぶる雨と誰か見ん花に昔の友しなけ
れば

と返歌した。この歌の解釈について新潮日本古典集成
『古今著聞集 下』では

この雨を昔を偲ぶ涙の雨と誰がみてくれましよう。ともに花をみてなつかしむ友もなくて(あなただけ(18)はわかって下さいましたか)。

とし、『フェリス女学院大学文学部紀要』の『古今著聞集』巻第五「和歌第六」を読む(1)では

この雨を昔を偲ぶ涙の雨と誰がみてくれようか。花を見て懐かしく思う友もなくて(あなただけでは分かってくれようか)。(19)

としている。どちらの意味も同様で、下の句を、兵衛の局が花を見て一緒に懐かしむ友がいまいことことを嘆く意味に解釈している。この場合、「花に」という語を「花見の場に」と、「昔の友」という語を「過去の御幸を覚えている、一緒に体験した友」と解釈していると受け取れる。

しかし、字義通りにB系統の下の句「花に」を花見の場ではなく「花」そのものと解釈すると、「(花見の場)はもちろんのこと、)花の中にも昔の友がいまいこと」という意味にもとれるのではないだろうか。

植物を自分の昔からの友と考える発想の和歌は古くからあり、藤原興風の

誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに
『古今和歌集』巻十七 雑歌上 九〇九番歌(20)

が有名である。この歌では、老いて知友がいなくなった詠歌主体が、松では友とはならない、と嘆いているが、同じく老いた身と松を詠った

嵯峨の家にとし久しくすみてよみ侍りける

前大納言為家

をぐら山松をむかしの友とみていくとせ老の世をおくるらん

『玉葉和歌集』巻第十五 雑二 二二二一番歌(21)

では、嵯峨の家に長年住む自分にとって、松だけが昔からの友だとしている。植物のみならず、例えば月など、和歌上では景物を友とする発想が見られる。同様に「花」という語についても、藤原家隆の

君が代は花も千歳の友として松と竹とに春風ぞ吹く

『玉吟集』一 詠百首和歌 千五百番歌合

五七四番歌(22)

などがあり、花を友とすることも特異な発想ではないと言えよう。

A B 両系統に共通する兵衛の局の返歌の末尾、「友しなれば」については藤原経家の

来鳴けどもおどろかれずや呼子鳥我さそふべき友しなれば

〔正治二年院初度百首〕秋日詠百首応
太上皇製和歌 一〇一九番歌⁽²³⁾

や、源国信の

いふ事もなき埋火をおこす哉冬の寢覚の友しなれば

〔堀河院百首和歌〕冬十五首 爐火
一〇九一番歌⁽²⁴⁾

などに見られるように、「友がないので」という意味に理解することが普通であることから、ここでもそのようにとって良いだろう。

「花に昔の友しなれば」の「花に」が、花見ではなく「花そのもの」を指す意味にとることができるかという点について、例えば「名詞＋に＋昔の〇〇がある／ない」という構造を持つ和歌を見ていくと、

題しらず
藤原基頼

ふる里の老木の桜きてみれば花にむかしの春ぞのこ
れる

〔玉葉和歌集〕卷第十四 雑歌一
一九〇〇番歌⁽²⁵⁾

猿沢の玉藻の水に月さえて池に昔の影ぞうつれる

〔秋篠月清集〕六十七番歌⁽²⁶⁾

正三位知家

ながむれば見し世の秋も忘れず月に昔の影やそふ
らん

〔続後撰和歌集〕卷第六 秋歌中 三七一番歌⁽²⁷⁾

などがある。引用した三つの和歌の解釈としては、（私が見ている）「花／池／月」というそれぞれの媒体に、昔の「春／影」が「残って／映って／添わっている（だるうか）」という意味にとるのが穏当であろう。これを素直にB系統の兵衛の返歌の下の句「花に昔の友しなれば」に当てはめれば、（私が見ている）「花」という媒体に昔の「友」が「いないので」ととることができる。「昔の友」という言葉は、現実の人としての友人のこと

ではなく、「松」の中に変わらぬものや、自分の年齢と同じ歳月を「昔の友」として見出すそうとした、興風や為家の表現と同じものである。それは兵衛の局が懐かしく思う存在としての「変わらぬもの」の象徴であり、その意味で右に挙げた三首の「昔の春」や「昔の影」と同義であろう。そしてそれが、「存在しない」としているのが兵衛の局の下の句である。

西行が兵衛の局に、かつて三院がいた頃の御幸を思い出させようとした時、兵衛の局にとって周囲で花を見ている上西門院の「わかき女房たち」はかつての友ではなかったはずである。そして、孤独な兵衛の局にとってはそれは眼前の花も同じで、かつての花とは替わって見えただけではないか。一五七話の返歌の下の句、「花に昔の友しなければ」からは、人は当然のことながら、あの頃の友である花を探すこともできない、全てがああ頃とは異なってしまったという兵衛の局の世界の変化に対する孤独の心境を歌ったと解釈することができる。

これは、兵衛の局がその場におらず、いたとしても別の日に別の場所で詠んだというA系統の詠歌状況よりも、一五七話において兵衛の局が花に直接対面しているという状況を創造したからこそ効果的に演出される表現であろう。つまり、A系統と比較したときにB系統に顕れる詠歌状況の違いと下の句の異同は、同じ意味を支えるた

めに連動しており、どちらかが欠けていればこの話の意図は薄れることになる。

このA系統とB系統の違いは、何に起因するのであるうか。

3 『古今著聞集』と『西行物語』の成立の前後関係と、『古今著聞集』編集過程における説話改変の可能性

十三世紀半ば頃に成立していたとされる『西行物語』には異本が多く、現在では一般に広本系と呼ばれる系統がより古いものとされている。文明本『西行物語』はこの広本系に属し、古態を伝える伝本の一つとして扱われている。先行研究によって『西行物語』との関係が示されてきた説話集は数あるが、『古今著聞集』との関わりは、特に成立年代との関係から言及されてきた。

周知の如く西行は、文治六年(建久元年)二月十六日、釈迦入滅の日には一日遅れて、河内国弘川寺で入寂したと伝えられている。従って「西行物語」の成立時期は、こうした虚伝生成の時期をどのようにかえるかということにより、改めて考察されるのはなからうか。その点で注目されるのは、橘成季著

『古今著聞集』の伝える西行往生談であると思う。⁽²⁸⁾

へ引用されたと考えにくい。⁽³⁰⁾

坂口博規氏は右のような視点から『古今著聞集』巻十三、哀傷の部に採られた西行の往生説話と『拾遺愚草』、『西行物語』に載る相当部分との比較を行い、『拾遺愚草』が西行の入寂を建久元年二月十六日とし、『古今著聞集』と『西行物語』が建久九年二月十五日としているところに、『古今著聞集』と『西行物語』の関係を見出した。その後、谷口耕一氏はその三者の影響関係を「『拾遺愚草』↓『古今著聞集』↓『西行物語』」の順番と整理した上で、

『西行物語』は建暦二年(一二二二)以降、建長三年(一二五二)以前の成立、建長六年(一二五四)以降ほどなく『古今著聞集』の説話によって増補・整理されたと結論づけておく。⁽²⁹⁾

とした。近年では木下資一氏が『古今著聞集』と『西行物語』の共通する説話に注目し、特に『古今著聞集』巻第二釈教の「西行法師、大峰に入り難行苦行の事」の關係から、

この説話について、『西行物語』から『古今著聞集』

として、他の共通する説話についても同様と考察し、『西行物語』の成立を『古今著聞集』以降と結論付けた。本稿で扱う一五七話も、『西行物語』と『古今著聞集』にのみ共通する説話のバリエーションである。原拠として擬せられている話とは、この両者のみが異なる意味を持つ改変が加えられているという点で、坂口氏が指摘した巻第十三哀傷部の「西行法師、釈迦入滅の日の往生を願ふ事」の事例と類似している。

こうしたことから、一五七話は、原拠の話を採用する際に『古今著聞集』が編纂過程で改変した説話を『西行物語』が取り上げた事例として、また広本系『西行物語』が『古今著聞集』の成立後にその形を整えたという説を補強する事例として整理することができる。前節で確認した一五七話におけるA系統とB系統の違いは、その原因の説明を『古今著聞集』に端を発する改変に求められるのではないか。

三、『古今著聞集』和歌の部の説話改変事例と、両説話の編集意図

1 『古今著聞集』和歌の部における説話の改変事例

『古今著聞集』巻第五の和歌の部において、それまで流通していた原話と異なる意味をもつように改変されたと考えられる説話として、巻頭話(一四三話)の玄賓和歌説話がある。この説話の他出類話との比較と検討について、詳しい過程は拙稿(二〇一九)に譲るが、『古今著聞集』成立期頃までの類話の詠歌状況と和歌は次のように整理できる。

A系統(『江談抄』／『閑居友』／『南都高僧伝』／『僧綱補任』裏書)

詠歌状況…(弘仁五年に／御門)に(大僧都／僧都)の位を与えられ辞する

詠歌…外国は山水清し事多き君が都は住まぬなりけり(『江談抄』)

とつ国は山水清しこと繁き君が御代には住まぬまされり(『閑居友』)

外国ハ山水清シ事多キ君カ都ハスマサレリ(『僧綱補任』裏書)

外国者。山水清之。事多之。君カ都者、不住マサレリ(『南都高僧伝』)

詠歌後…特になし(『閑居友』のみ、「御門」による弘法大師の文)

B系統(『古今著聞集』)

詠歌状況…嵯峨天皇に僧都の位を与えられ辞する。

詠歌…外つ国は水草清しことしげき天の下にはすまぬまされり

詠歌後…嵯峨天皇により歎感され、施物を送られる。

『古今著聞集』の詠歌のみ上の句と下の句が他のものと異なっていることがわかる(傍線部)。上の句で、A系統では「山水清し」となっている表現から変化しているB系統の「水草清し」という表現は、下の句のA系統における「君の都／御代」という語を、B系統における「天(天／雨)の下」という語に置き換えたことにより成立した修辞であり、『古今著聞集』のみにこの歌が採られていることからして、現在確認されていない資料や風聞の存在、または編集過程による改変が疑われる。拙稿(二〇一九)ではこの結論を『古今著聞集』の編集過程による改変とした。

その理由の一つは、この明確な意図を持った周到な和歌の改変が、他の説話には見られない『古今著聞集』独自の詠歌状況や、詠歌後の状況と大きく関わると思われるからである。具体的には、詠歌状況としてのa「嵯峨天皇による任官」という史書の記述とは異なる虚構と、

詠歌後のb「嵯峨天皇による観感と施物」という史書の記録と同様の記述の、a「虚構」とb「記録」の両者の要素を繋げるための、嵯峨天皇と玄賓の関係を阻害しない、「君」の語を使用しない歌への改変ではないかという疑いである。

二つ目の理由は、『古今著聞集』和歌部の本文に、他の記録や説話類との記述の齟齬や、孤例とも言える話のバリエーションが散見されるという事実である。⁽³⁾ここからは、『古今著聞集』では他に採られていないような異同のある説話を敢えて取り入れていったという編集方針も考えられるが、そういった依拠資料が見つからない上で、その誤記や誤伝とも見える異同が、ある整合性をもった意図を支える要素として説明がつかう場合、編集の過程で手が加えられている可能性が視野に入ってくる。

こうした一四三話のような事例を考えると、今回の一五六話、一五七話の西行両説話の他の相当部分との異同も、『古今著聞集』における改変に端を発するものとして考えることができる。

2 『古今著聞集』巻第五和歌第六、一五六話と一五

七話の編集意図

両説話が『古今著聞集』編者による改変の可能性がある場合、その編集意図はどのようなものが考えられるだろうか。一五六話も一五七話も、先行する在りし日の輝かしい時代と、その喪失後の世界における、往時を偲ぶ人々の思いという対比の構造を見出すことができる。

一五六話に関しては、『山家集』などで相当する場面にはなかった「和歌の道すぐれさせ給ひたりし」という崇徳院についての説明が挿入されることで、文章上では単に和歌の衰退を嘆いていたと読める他の話と異なり、和歌文化の優れていた崇徳院時代を偲ぶという意識が明確化している。

また一五七話では、兵衛の局による返歌の下の句において、往時の友がいないと嘆く主体が花から兵衛の局自身に変わること、三院のいた在りし日の御幸との落差が劇的に演出されている。素晴らしかった過去がもはや存在しないということを強調するためには、他の西行の家集に見られるような、時間と空間を移すという緩衝を挟んだ後の、あるいはそもそも参加しなかったという状況での詠歌ではなく、兵衛の局が直接花見のその場で自分を取り巻く女房のみならず、眼前に開く花ですらかつての世界のものではないと認識し、それが詠歌に顕れていることが必要だったのではないか。ここでも、前話の一五六話に続いて残された者が往時の素晴らしさを偲ぶ

という構図が、原拠となる他出の相当部分よりも強調されるように改変されている。

鎌倉時代に編纂された『古今著聞集』の性質として、過ぎ去った王朝貴族時代に対する憧憬があるという説明は一般的になされているものである。

古今著聞集の著者橘成季の胸中には、「いにしへより、よきこともあしきことも、しるしをき侍らずは、たれかふるきをしたふなさをのこし侍べき」(跋)と記している通とおり、古代貴族世界に対するやみがたい追慕の情があり、それは説話の結びにしばしば附記された、「昔はかく期せざる事も、やさしく面白き事、常の事なりけり。いみじかりける世なり」(三四五段)、「むかしは此事つねの事なりけるに、中比よりたえにけり。くち惜き世なり」(四七四段)、「かくるすき人も、いまはなき世なりけり」(五六段)などの言葉として、美しいもの、よきもののほろびゆく現在と、それらが「つねの事」として生きていた「いにしへ」とをひきくらべ、「いにしへ」に対する無限の憧憬を、ほとんど詠嘆的にくりかえしているのによっても、このような懐古的な思想が、著聞集編成のいわば第一原理であったことは疑えない。

(日本古典文学大系『古今著聞集』「解説」³²)

王朝の盛時が次第に遠いものになって、その文化との距離を改めて自覚し、その精神を追慕し、憧憬し、今や再びとり返すすべもないものとして、遠くに眺めて詠嘆するといったような意識から、説話や説話に付属する評論が発想される。この点が最も強くあらわれているのが『著聞集』であるが、こういう傾向は、鎌倉末から南北朝・室町期と進むにつれてさらに強くなり、『徒然草』や物語小説の発想や、また王朝古典の研究の盛行などの諸方面にさらに色濃く見られるのである。

(新潮日本古典集成『古今著聞集 下』「解説」³³)

『古今著聞集』を扱った主要な注釈書の解説がその性質として示しているような、王朝世界や貴族文化に対する憧憬の念は、和歌部の一五六話、一五七話からも受け取れる。しかし、本稿で扱ったこの両話に見られるような編集意識は、採話基準や配列、評語といった、説話の原拠そのものに依拠する段階よりも深い部分へ踏み込んで、その憧憬の念を表現しようとしているのではないか。本稿で確認できた一五六話と一五七話の両話とも、「しのばめ」や「しのぶる」といった言葉が末尾の返歌

部分で使われているのは、採話の段階で過去を追慕する意図を持っていたことを十分感じさせるものである。そしてその上で行われた原拠からの改変は、評語を伴わずとも過去の世界を偲ぶという話の構図が受け手に明確に伝わるよう、編者の意図する方向へと強調したものと見える。

『古今著聞集』における他出類話との異同は、未発見の依拠資料や風説を元とした可能性もあるにせよ、それが見つかからない説話に関しては、編集過程における原話改変の可能性が、説話の解釈のうちに残されるべきだと考える。

おわりに

『古今著聞集』巻第五和歌第六、西行和歌説話の一五六話、一五七話について、その他出類話との異同の整理と新しい解釈の提示、そして編集過程における改変の可能性について検討してきた。改変に関してはまだ可能性の域を出していないが、現時点で『古今著聞集』にのみ見られる話のバリエーションや、『古今著聞集』に端を発したと思われる異質な話の系譜といった現象が、複数の話に存在していることは確認できた。

これらの話も、未発見資料や、資料として残る性質の

ものではない媒体から編者が取材して採話した可能性は確かに存在する。しかし、拙稿(二〇一九)で扱った玄寶和歌説話(一四三話)、今回扱った西行が関わる一五六話と、特に一五七話といった話は、依拠資料が発見できていない以上は改変の可能性も濃厚に疑われるべきだと言えるほどに、原話の性格を変更しようとする意図が働いている。少なくとも、原話の持つ性質をそのまま保持しようとする意識のもとで編集された話とは言い難いのではないか。

今後『古今著聞集』各話の精読と他出類話との関係の整理を進めることで、この疑問に解決の方向を見出すことができると思われる。

【注】

- (1) 新潮日本古典集成(第五十九回)『古今著聞集 上』(西尾光一 小林保治 校注 一九八三年六月 新潮社) 二〇九～二一〇頁。
- (2) 拙稿『古今著聞集』巻第五和歌第六、玄寶和歌説話の編集意図について『中央大學國文』第六十二号(二〇一九年三月 中央大學國文学會)
- (3) 『西行全歌集』久保田淳 吉野朋美 校注 二〇一三年十二月 岩波書店)二〇八頁。
- (4) 『西行全集』久保田淳 編 一九八二年五月 財団法人日本古典文学会 貴重本刊行会)『西行物語』(文明本

下) 九八九頁。三角洋一氏翻刻。

(5) 『延慶本平家物語全注釈』第一末(卷二)〔延慶本注釈の会 二〇〇六年六月 汲古書院〕四九三、四九四頁。

(6) 崇徳院は勅撰集に七十七首入集『和歌文学大辞典』「崇徳天皇(佐山濟、柳井己西朔) 一九六二年十一月 明治書院」する歌人としての才能と、『詞花和歌集』や『久安百首』を作らせ自らもその改良を目指す意欲、そして多く宮中での歌会を催したことが知られている。

『和歌文学大辞典』の「年表」からは、鳥羽院や白河院に比べて崇徳院が主催したと思われる歌会が多く見られる。こういった歌壇への影響力が、当時の和歌の道の隆盛に繋がっていたと判断されるのは当然であろう。

(7) 保安五年、閏二月十二日の白河院、鳥羽院、待賢門院が白河へ花見をした時に法勝寺に渡っている。『今鏡』「白河の花の宴」には、そのとき女房が詠んだ歌が記されており、兵衛の局のものと思われる。この歌は『金葉和歌集』巻第一春部にも採られている。

待賢門院兵衛

よろづ代の例とみゆる花の色をうつしととめよ白河の水

右の参考は『今鏡全釈(上・下)』(海野泰男 著 一九八二年三月上巻、一九八三年下巻、パルトス社)、和歌の引用は新日本古典文学大系9『金葉和歌集 詞花和歌集』(川村晃生 柏木由夫 工藤重矩 一九八九年九月 岩波書店)一二頁の三十三番歌。

(8) 前掲注3『西行全歌集』二十四頁。

(9) 前掲注4『西行全集』「西行上人集(李花亭文庫本 春)」三三三頁。藤田百合子氏翻刻。

(10) 前掲注4『西行全集』「山家心中集(云西行自筆本)」四八八頁、四八九頁。久保田淳氏翻刻。

(11) この左注の解釈について、日本古典文学大系29『山家集 金葉和歌集』(風巻景次郎 小島吉雄 校注 一九六一年四月 岩波書店)「山家集」の三十七頁の頭注で風巻氏は、兵衛の局が風邪気味であり、花見は若い人達だけだった、と解釈した。新潮日本古典集成第四十九回『山家集』(後藤重郎 校注 一九八二年四月 新潮社)三十六頁の頭注では、「兵衛は風邪であったか、或いは花を散らす「風」か」と解釈し、和歌文学大系21『山家集・聞書集・残集』(西澤美仁 宇津木言行 久保田淳 著 二〇〇三年四月 明治書院)「山家集」(西澤美仁氏)の二十一頁脚注では、「花を散らす風に病の風邪を寄せ。風邪を引いた私が供奉すると花が風で散るといけな、という配慮によって」と解釈し、その上で「兵衛は不参ではなく、風邪を押しての出席が藤原実定や寂然との贈答から確認できる」としている。また『山家集』(西行 宇津木言行 校注 二〇一八年九月 株式会社KADOKAWA)二十五頁の脚注で、宇津木氏もこの左注について、花を散らす風に風邪をかけており、兵衛の局は不参としている。

(12) 前掲注4『西行全集』「西行物語(文明本 上)」九

七四頁。

- (13) 誤記と思われる。同じく広本系『西行物語』で、文
明本より後のものとされる国立歴史民俗博物館蔵、田中
穰氏旧蔵『西行物語』では「じやうせい門院」となっ
ている。(内田藩子「資料紹介」国立歴史民俗博物館蔵田
中穰氏旧蔵『西行物語』・翻刻・附解題)『国立歴史民俗
博物館研究報告』二〇〇八年十一月 国立歴史民俗博物
館(四二七頁)。
- (14) 前掲注11『山家集 金槐和歌集』『山家集』三十七
頁の頭注による。
- (15) 前掲注11『山家集』三十六頁の頭注による。
- (16) 前掲注11『山家集・聞書集・残集』『山家集』二十
一頁の脚注による。
- (17) 前掲注11『山家集』二十五頁の脚注による。
- (18) 前掲注1『古今著聞集 上』二一〇頁の頭注より。
- (19) 谷知子氏 繩手聖子氏 金井由貴子氏 蔡雅如氏 肥後
陽子氏 大江あい子氏 堀江マサ子氏 伊藤香弥氏 『古今
著聞集』巻第五「和歌第六」を読む(1)、『フェリス女
学院文学部紀要』四十七号(二〇一二年三月 フェリス
女学院大学)二三五頁。当該箇所は堀江マサ子氏の担当。
- (20) 新編日本古典文学全集11『古今和歌集』(小沢正夫
松田成穂 校注・訳 一九九四年十一月 小学館)三四
四頁。脚注の訳文は「私は誰を心を知り合った親友とし
たらいいのだろうか。高砂の松は私に負けない老齢では
あるが、松では昔馴染の友人にはならないのだから。」

(21) 笠間注釈叢刊22『玉葉和歌集全注釈 下巻』(岩佐美
代子 著 一九九六年九月 笠間書院)二四二頁。通釈
では、「我が家のある小倉山で、年経る松だけを昔から
の友と見ながら、あと一体幾年、私はこの老衰の身で生
きて行くのだろう。」

(22) 和歌文学大系62『玉吟集』(久保田淳 著 二〇一八
年一月 明治書院)七〇頁。脚注の訳文では、「わが君の
御代は花も千歳の友として散ることなく、常磐の緑の松
と竹とにいつも春風が吹いている。」とする。

(23) 和歌文学大系49『正治二年院初度百首』(久保田淳
中村文 渡邊裕美子 家永香織 木下華子 高柳祐子
著 二〇一六年九月 明治書院)一七八頁。脚注の訳文
では「来て鳴いても驚かれないよ、呼子鳥は。私を誘っ
て呼ぶような友はいないので」としている。

(24) 和歌文学大系15『堀河院百首和歌』(青木賢豪 家永
香織 久保田淳 辻勝美 吉野朋美 著 二〇〇二年十
月 明治書院)二〇一頁。脚注の訳文では、「冬の夜に目
を覚まし、起こして話をする友もいないので、代わりに
何も話しはしない埋火を熾すよ」としている。

(25) 前掲注21『玉葉和歌集注釈 下巻』(四七頁。通釈で
は「故郷の老木の桜よ。久々に訪れて見ると、その花に
は普通りの面影が残っているよ。」)

(26) 和歌文学大系60『秋篠月清集』(明恵上人歌集) (谷知
子 平野多恵 著 二〇一三年十二月 明治書院)一四
頁。脚注の訳文は「猿沢の池の玉藻がゆらめく水に月が

冴えて、池の面に奈良の御代の面影が映っているよう
だ。」

(27) 和歌文学大系37『続後撰和歌集』(佐藤恒雄 著 二

〇一七年一月 明治書院)六六頁。下の句について脚注
では「月に昔の影やそふらん——月そのものに昔の面影
が添わっているのであらうか」としている。

(28) 坂口博規氏「西行物語」の成立時期をめぐって

——絵巻と物語の関係を中心に——『駒澤大学文学部
研究紀要』三十四号(一九七六年三月 駒澤大学)四五頁。
(29) 谷口耕一氏「西行物語の形成」『文学』四十六号(一
九七八年十月 岩波書店)四十四頁。

(30) 木下資一氏「西行伝承の世界——文献説話から見た
西行像変容——」『西行学』第九号(二〇一八年十月 西
行学会)五十六頁。

(31) 例としては、例えば本稿で扱った西行説話の前後だ
けを見ても、一五四話の藤原実行の経歴の齟齬、一五二
話の行尊が天王寺別当となった際に生きていない津守国
基と会っている事、また一六〇話で長寛の頃の藤原家通
を「六角左衛門の督家通」としていることなどが挙げら
れる。

(32) 日本古典文学大系84『古今著聞集』(永積安明 島田

勇雄 校注 一九六六年五月 岩波書店)「解説」九頁。

(33) 前掲注1『古今著聞集 下』「解説」(西尾光一氏)四
三一頁。

(おのぞら たかゆき 本大学院博士課程前期)

